

「現場ではいつも安全靴にヘルメット。生涯現役がモットーです」

建設機械のエンジニアとして訪れた国は128カ国。カンボジアでの出来事をきっかけに、65歳から対人地雷除去機の開発に取り組んだ。JICA登録の個人コンサルタントとして今でも現役で活動する中込璋さんは、仕事の傍ら、地雷廃絶のための展示会や講演活動を精力的に続けている。



photo by Asada Yuki

128カ国を飛び回ったエンジニア

「地雷の種類が多さに驚きました。地雷が埋まっているところで生活している人は、恐怖感で

いっぱいだろうと思いました。日本は平和で、五体満足の人たちが多いですが、カンボジアなどの人々はたった一瞬の出来事で足や手がなくなってしまう。地雷など踏まずにいたら、ものすごいスポーツ選手になってい

たかもしれないし、ほかにもある可能性があるがたかもしれないと思うと、とても悔しいです」

中学生たちの手で升目いっぱいにつづられた感想文を披露してくれたのは、今年4月に満75歳を迎えた中込璋さん。建設機械のエンジニアとして、40年以上にわたって世界各地を飛び回ってきた。10年ほど前からは、仕事の合間に中・高校や企業、公民館などを回り、地雷廃絶を訴える講演活動を続けている。

「あなたがもし地雷で手足を失ったら、どうしますか」という問い掛けに、多感な年ごろの子どもたちは、被害者となが身を重ね合わせて涙する。こうした子どもや大人たちからの感想文を、中込さんは大切に保管している。生まれは山梨県の八田村（現・南アルプス市）。父親が機械工場を経営していたせい、小さなころから機械に興味があった。小学生時代、体格が良く、ガキ大将だった彼は、都会から疎開に来た子どもたちの面倒を見ていたという。その面倒見の良さ

は、後に途上国からやって来た人々に向けられたよつだ。大学の機械工学科を卒業後、

入社した建設機械専門のマルマテクニカ（株）では、JICAを通じて途上国からのエンジニアを受け入れ、研修を行っていた。その担当が若き日の中込さんだった。会社にとつて初めての大卒エンジニアだった中込さんは、アメリカのキャタピラー社に派遣され、最新の技術を取得し、同僚や研修員に伝えていった。

その後、JICA調査団の一員などとして海外へ頻りに派遣されるようになる。仕事の内容は、相手国から要請のあった職業訓練センターの建設に際し、候補地を調べ、目的に合った施設のレイアウトを提案することや、納入された機械の扱い方を指導するというものだ。これまでに訪れた国は128カ国。特に多かったのは、カンボジアの17回。そのカンボジアで、第二の人生への転機が待っていた。

人生の第二ステージで対人地雷除去機を開発

60歳の定年を間近に控えたころ、マルマテクニカの技術部長兼専務を務めていた中込さんの



山梨日立建機がニカラグアに納入した対人地雷除去機と中込さん(左)



Nakagome Akira

JICA個人登録コンサルタント

中込 璋

挑戦者たち
Stories of
Challengers
Vol.22

日本が兵器使用禁止の旗振り役を

地雷廃絶を訴える国際NGO、地雷廃絶国際キャンペーン(ICBL)の「ランドマイン・モニター2006」によると、05年の地雷による被害者は、報告されただけで7,328人。これは、前年を11%も上回る数だ。実際には、毎年1万5,000~2万人が新たに地雷または不発弾の被害に遭っていると予測する。

「地雷除去を手作業でやると500年以上かかる。私はそれを機械化で30年以下にしたい(中込さん)。

対人地雷全面禁止条約の批准国である日本は、訓練用を除く対人地雷をすべて廃棄した。だが、不発弾の被害が問題になっているクラスター爆弾(30ページ参照)の使用禁止に消極的な日本政府に対し、中込さんは業を煮やしている。「日本が禁止の旗振り役をしなきゃいけないんだ」。

地雷やクラスター爆弾の現状を訴える講演活動を、中込さんは当分やめられそうもない。



2006年、長年にわたる海外での国際協力活動に対し、川崎市長から感謝状が贈られた

カンボジアに地雷がなくなったら、少し休もうと思っています

当時、9・11以降のアメリカ軍によるアフガン攻撃で、劣化ウラン弾が使用されたという報道が飛び交ったため、援助活動に支障が生じていた。そこで、すでに地雷関係の第一人者として知られていた中込さんに白羽の矢が立ち、ガイガーカウンター(放射線測定器)を携え広い国土の3分の1を調べて回った。結局、ウランは検出されなかった。「その後です。アフガンへ復興援助のために人がどんどん出されたのは」。

もしも劣化ウラン弾が使われていたなら、被爆したかもしれない危険な調査。「現場の仕事が好きだから引き受けた。現場ではいつもヘルメットに安全靴姿です。僕でなきゃできない仕事があるわけよ」と、笑顔で「大したことない」とでもいっように受け流す。国連のアフガニスタン地雷対策プログラムからは、この調査に対して感謝状が贈られた。「アフガニスタンはね、畑に小麦が育って大地が緑になると国民は今年も生きていけるなと思うの。地雷を取り除けばその土地は畑にできる。だから、地雷を取った後の土地の色というのは大事なんです」。

地雷埋設国という危険な地へ行くことに、家族からはいつも反対されるといふ。2人の息子にも「いいかげん引退したら」と言われるが、生涯現役がモットーの中込さんは耳を貸さない。そんな彼を、20年の付き合いがあるJICAアジア第一部の末森満部長は「一途な人」と評し、「いつまでもお元気で、次世代に地雷の問題を伝えていってほしい」と話す。



仕事の合間に病院を訪れ、地雷の被害者を見舞う。日本の中・高校生から預かった文房具などを持参することもある(カンボジア)



今年2月、神奈川県川崎市多摩区総合庁舎で、地雷除去活動の展示会を行った

は、木を刈っている最中に地雷に触れて壊れてしまった。カンボジアでは、1970年代から続く内戦であちこちに地雷がまかれ、命を失ったり手足をなくしたりする人が今でも後を絶たない。「病院へ行くと、地雷で片足を飛ばされた人たちが、200人も300人ももうんうんうなつてベッドに横たわっているんです。これは何かしらないといかんと思つた」。

「よし、地雷除去機を造ろう!」。マルマテクニカを定年退職した中込さんは、雨宮さんの会社に迎えられ、同社のメンバーとともに対人地雷除去機の開発に着手した。当時、日本には地雷除去機を造る会社はどこにもなかった。アメリカやヨーロッパでは造られていたが、それは軍隊の通り道の地雷を除去するためのもので、農地開発には役立たない。カンボジアの人々が望んでいるのは、広い地域の地雷を安全に取り除き、土地を農地や牧場に変えることのできる機械だ。

アメリカの除去機を「見よう見まね」で、設計から始めて約1年。ようやく完成した除去機をカンボジアへ運び、国連とカンボジア地雷対策センター(CMAC)の立ち会いのもと、実証テストが行われた。最初の地雷除去率は約90%。CMACが求める99・6%にはわずかながら及ばない。試行錯誤で改良を加え、合格のお墨付きをもらうまでに1年半かかった。「苦勞したのは、地雷を確実に取ること、オペレーターが安全に作業できること、スピードを速くすること」。パワーシヨベルの先端に超合金の回転刃を取り付けた対人地雷除去機は、木を切り、地雷を爆破処理する一台2役を担う。地雷処理のスピードは、手作業の250~300倍。「合格のサインをもらったときは、乾杯しましたよ」。



2005年10月、緒方貞子 JICA 理事長(右)から理事長賞を受け取る中込さん。これまでの貢献が評価された

地雷がなくなるまで働き続けたい

Nakagome Akira

なかごめ・あきら JICA個人登録コンサルタント。1932年山梨県出身。山梨県立韮崎高等学校、山梨大学工学部機械工学科卒業後、建設機械のエンジニアとしてマルマテクニカ(株)に勤務。機械設計の傍らJICA研修員の指導に携わり、日本のODAによる職業訓練センター設立のための調査で世界各地を飛び回った。97年に再就職した山梨日立建機(株)では対人地雷除去機の開発に携わり、以降、地雷廃絶のための講演活動などを続けている。2002年に個人コンサルタントとしてJICAに登録。04年にカンボジア政府および国連アフガニスタン地雷対策プログラムから感謝状を、05年にJICA理事長賞、06年に地元神奈川県川崎市から感謝状を授与された。07年7月、地雷除去機開発と職業訓練センターへの貢献が評価され、外務大臣表彰を受賞。